

北海道チョウザメの博物誌 2

—明治期以降の北海道におけるチョウザメ捕獲に関する記録集成—

Natural history of the Hokkaido sturgeon 2

Compilation of records of sturgeon capture in Hokkaido
from Meiji period to Early Showa period

石橋 孝夫*

Takao ISHIBASHI*

要 旨

本稿では明治期以降から北海道ではチョウザメが絶滅したとされる昭和初期までの道内のチョウザメ捕獲記録の集成を行った。その結果捕獲時期では4月～6月と8月～11月の2時期がみられ、捕獲方法では河川内ではテシ・ウライチセタ（網）、マレク（マレップ）、など近世から受け継いだ伝統漁法によりアイヌ民族が漁を行っていた。また海面や河口域では、主にサケマス定置網で混獲されていた。しかし実態は不明であるが一部では配縄やロシア人による目的的な漁も存在した。

キーワード：ミカドチョウザメ、テシ・ウライ

チョウザメ捕獲記録集成

以下に明治期から昭和10年代にかけて13点のチョウザメ捕獲に関する記載のある資料を「」で括って示した。年代的には明治期の記録10件（①～⑩）、大正期記録1件（⑪）、昭和期の記録2件（⑫⑬）である。大半が公刊されている本などから抽出し関係部分をそのまま示したが、④の北海道毎日新聞についてはマイクロのコピーから活字化したもので旧字や旧漢字を現代文及び当用漢字に直して示した。また判読できない字については■で示した。

まず、最初は明治の十勝川の支流札内川でのチョウザメの捕獲例について示す。①②は十勝地方開拓の先駆者晩成社幹部の日記である。彼らは土地のアイヌの人とも親交を結び良好な関係をもっており、チョウザメ漁の見物あるいはその分配にあずかるなどをしていた。

①『鈴木銃太郎日記—十勝開拓の先駆者とその人々』田所武編（1985）

「明治15.8.28 陰、終日筆記、晩来発熱、稍軽ろし、二鮫シマキより貰う。」 p 37

「明治21.6.15 晴南瓜地ならず。時に札内川に於いて昨夜蝶鮫の漁ありと聞き常盤タサカリ等と同所に至り暫く見物す。」 p 144

「明治28.7.28 もち粟除草、余勇一両人は白大豆馬耕作 今曉鮫漁獲一同大渡辺柴田に小片を贈る。明治28.7.29又鮫漁あり、伏古縁者に小片贈る。—略—」 p 166

②『渡邊勝・カネ日記』小林正雄編（1961）

「明治十八年

○六月十七日 夜来雨 ハノ方ヨリ鱒及サメを貰フ 文助帰り」 p 35

「明治十九年

○六月一日火 晴又雨 又ヒヨウ降 四十五度後 札内河ニテ土人等ト共ニ蝶ザメ九本ヲ得ル

○六月二日水 晴 三十九度 降霜 為メニ豆類

* いしかり砂丘の風資料館（学芸協力員） 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

多枯ル 前札内ニ蝶サメ壺本ヲ得後土人等来ル飲ム アンノイノ付古別へ行」 p45

二つの資料から6月～8月末にチョウザメが捕獲されていることがわかる。捕獲は鮭鱒とともに行われたことがうかがわれ道具は書かれていないが、捕獲している人がアイヌの人と推定され、夜間も捕獲していることからマレクが使用されたと推定される。開拓使は鮭の資源保護名目に河川での禁漁を布告し、この地方でも明治16年から河川での禁漁が始まる。その後晩成社の申し立てにより禁漁の規制は緩められたが、公然と河川漁を行うのが憚られたようであり、夜間漁が行われたものとみられる。したがってチョウザメも夜間に鮭鱒とともに捕獲されたと考えられる。魚体の大きさは不明だがおそらくチョウザメもマレクで捕獲されたと推定される。注意されるのは1回の漁で9匹も獲ることがあったようであり、一か所に集まっていたチョウザメが捕獲されたものとみられる。松浦武四郎（1857）の『天塩日誌』に頭を上げて丸木舟の方に集まってきてチョウザメは気味が悪いものだという記載がある。夜間という条件を考えると光や音に反応して寄ってきた可能性があり、その習性を利用して捕獲したのではないだろうか。

③『北海道漁業志稿』北水協会編（1935）

（表1）

本書は刊行が昭和10年（1935）となっているが、前書きにもあるとおりデータは明治22年（1889）のものである。

この資料では「鱒魚」の字をあて、産地は石狩と浦河の2か所のみで天塩川は記載されていない。漁期は6月～8月でとくに浦河では「配縄＝延縄」による捕獲が行われているとしており注目される。この記述だけではチョウザメを目的とした延縄なのかどうか判断がつかないが、管見の限りではチョウザメの延縄漁を行ったというのは唯一この記録だけであろう。また消費形態は生魚や塩蔵して食べられたとあり、ほとんどが地元で消費されたのだろう。

ちなみに延縄によるチョウザメ漁はロシアのエニセイ川で行われており、そのことがアスターフィエフ著（1976）「ちょうぎめ漁の穴場で」という作品にある。

④「石狩河鱒に関する問答」明治22（1889）年11月8日付北海道毎日新聞698号

「◎石狩河鱒に関する問答

さきに石狩河産鱒の事に付き大日本水産会幹事長柳橋悦氏より北水協会々頭伊藤一隆氏に宛て調査を依頼ありし事項に関し過月中同氏より回答されしが其際右鱒の剥製見本は追て寄贈すべき旨をも約せられし事にて此ほど該見本を回送されし由今右に関する質疑及び取調書を得たれば左に掲載す

大日本水産幹事長の照会

調査事項

一 石狩河に産する鱒魚（此文子真のテフサメに中るや判然せずと雖も暫く仮に用ゆ）即ち「スタルジョン」は左に掲ぐる種類の内何種と同一なるや又別種なるや別種ならば形体尺度詳に説明ありたし

甲 「アシペンセルザー」「オキサイルヒンチャ

表1. 『北海道漁業志稿』（北水協会編，1935）.

鱒 魚					
産地	漁期	漁 法	造及び販売	摘 要	
日高 浦河	自六月 至八月	配縄にて漁す	生魚にて食し又は塩漬として貯ふ、 其皮は往時は刀の鞘を飾るに用う。 故に内地に輸送販売せり	鱒魚は重に石狩川に産す。 形鮫に似て背上鱗斑を為す。	
石狩 石狩	同			其産地は日高、石狩の諸川に産す。 他は未だ漁獲せし事なし。 従来無税なり	

- ス」
大西洋の海岸に産す即ち欧州の真鱒即ち「アシペンセル、スタリオカ」同一物
- 乙 「アシペンセル、プレビロストリス」
同海産鼻短く且つ鈍角なるを以て甲種と区別す未だ「コット」岬以北に見す其産少なし然ども夏季大河大江に大群をなして浜り水面に飛躍す
以上二種は五尺より十二尺の身長に達す欧州にて十八尺の真鱒捕しことあり
- 丙 湖鱒「アシペンセル、ラヒガンダス」。
衆人板鱗を二十八と定むれとも「ジルダン」氏の説に約三十四と云う
湖江及 河に産す
- 丁 「カリホルニア」鱒「アシペンセル、トランスモニタナス」白鱒
- 戊 「アシペンセル、メシヲロストリス」緑鱒
- 乙 「ショベルノウスト、スタルジオン」一名「スカヒリンチョブプラクアリス」
- 一 放卵は水源又は下流にても淡鹹相分るるの地を以てすと云う石狩河にては如何
- 一 放卵は地方に依り遅速あれども大約六月なり石狩河にては何月頃なりや
- 一 稚鱒は他魚の食餌となり大に害を蒙ると雖も弥々成長する時其鱗甲に鋭刺を生ずる故に害を受けず此刺■するに随ひ成長すると云う石狩河産も亦然りや
- 一 鱒魚は「ランブレイイイル」鰻の一種の為に大に苦めらるるものなり此鰻の食物は鱒甲の隙中に住む「スライム」(虫の類)なるを以て鱒甲を鰻の穿鑿する為疵を蒙り遂に死に至ることありと云う石狩河にても其痕跡ある魚を捕りしことありや
- 一 鱒魚は常に鰻あり依て考うるに一時に放卵するものあり石狩河にて獲るものも亦た此の如きか
- 一 米国「オハヤウ」「サンダスキー」にては「ホンドラット」(網名)にて捕ひ浅灘に遊ぶものは突殺と云う石狩河にては捕漁は如何の法を用ゆるや
- 一 「カビヤ」缶詰及鱒肉の燻製は試みさるか若し製品あらは寄贈ありたし
米国「オハヨー」州「フカチド」会社製品と比較せん

北水協会々頭の回答

- 一 石狩河産鱒魚は未だ其の何種に属するや判然せず

- 元来鱒魚は成長の度に依り大に其形状を變するものなるか故に種類の判定極めて困難にして誤謬錯雑を生ずることある由なれば今予か所蔵の不充分なる参考書に依りて其種類の判定を企つるは甚だ覺束なき事なれば当地博物場にある見本を精密に写生して送付す(種類判定に必要な点は特に注意を加へ之を写せり)猶本年の夏季に至れば燻製の見本を寄贈すへし
- 二 六月頃に至れば空知太より上流十里滝の下に群集すると云う是即ち産卵の為ならんか
- 三 六月頃なり
- 四 然り
- 五 なし
- 六 石狩河に於て鱒魚を捕獲するは五六月に限る其頃常に鰻あり
- 七 石狩河に於ては稀に鱒建網に入るものを捕獲するのみにて別に其漁法為し蓋し其魚の多からさると需用少き為なり尤も土人か川上に群集するものを捕うるは河中に柵を構ひ別紙図面の如き「チタセ」と称する網を用ゆ
- 八 燻製は未だ曾て試みしことなし「カピア」は開拓使物産局に於て試製せしことありしが元料を得る甚だ困難なるか為め一ケ年限りにて之を廃止せり故に目下見本品なし」

この記事は大日本水産会幹事長柳植悦から北水協会々頭伊藤隆一へ宛てた「石狩川チョウザメの種類、生態、捕獲などに関する調査とその回答」についての記事で、当時、大日本水産会では石狩川のチョウザメに関して並々ならぬ関心があったことを示す資料として注目される。なおこの資料については、すでに鈴木トミエ(2007)が一部を紹介しているが、ここでは全文を掲載した。

この記事から捕獲は「六 石狩河に於て鱒魚を捕獲するは五六月に限る其頃常鰻あり」としており、捕獲は5、6月でこの時期には「鰻＝はらご・卵」を持っていると報告している。また捕獲法について「七 石狩河に於ては稀に鱒建網に入るものを捕獲するのみにて別に其漁法為し蓋し其魚の多からすると需用少き為なり尤も土人か川上に群集するものを捕うる河中に柵を構ひ別紙図面の如き「チタセ」と称する網を用ゆ」とあって

「石狩川ではチョウザメは稀に建網に入るものを捕獲するだけで特定の漁獲法はない」「その理由は魚が多くないこと、需要が少ない」ことをあげている。「しかしアイヌの人は川上で群集するのを柵を設置して別紙図面のようなチセタという網で捕獲する」としている。「柵」とは杭列にしがらみを付けた定置式内水面漁撈施設であろう。おそらくテシやウライのようなものを指しているのだろう。網の「チセタ」というのは通常の網かタモ網のようなものか図面もないため不明である。なお「チセタ」と読んだが活字が鮮明でないため、誤読の可能性もある。

⑤「天塩川沿岸状況調査復命書（中）」興津寅亮（1894）

この資料は明治27年、当時苫前外二村戸長の興津が増毛警察署長らとともに天塩・中川・上川を視察した際の報告書である。

「(三) 水陸産最近ノ収穫高及将来殖産ノ目的

アベシナイ 河鮫34束

亦川鮫ノ如キハ凡四十里浜上。深淵ニテ産卵ス。其季節ハ五月下旬ニテ下流ノ際河中ニ欄(乱)杭ヲ打チ併ヘテ 其中央ニ築ヲ造リ該魚下ル処ヲ捕ス 土人ハ築ヲ(ウライ)ト云フ」

とあり、天塩川では河口から160kmも上がった場所の深い淵で産卵する。産卵期は5月下旬である。そしてチョウザメが川を下るのを狙って築(ウライ)で捕獲すると述べている。ウライでの捕獲時期は産卵からそう遠くない時期で6月頃かと思われる。またアベシナイではチョウザメの捕獲数が30から40匹に上る報告されている。ウライを使っている点から捕獲に従事していたのは前出「石狩河鱒に関する問答」と同じくアイヌの人と推定される。

ところで捕獲された魚はどのような消費されたのであろうか。この報告では捕獲されたチョウザメがどうなったかの記載はないが、次に示した資料では天塩川で捕獲されたチョウザメが札幌に運ばれ売られていたとの報告がある。

⑥「北海道に普通に産するチョウザメ」大瀧圭之介（1907）

「毎年七八月の頃に至れば、札幌市魚市場にチョウザメあり、其大き一尺二三寸以上一尺七八寸のもの多し・・・冬期に至れば五尺以上五尺八寸位の老成魚あり、皆天塩川或いは石狩川にて捕獲するものなりと云う」

この記録では毎年7、8月ごろ札幌の市場に並ぶ季節の魚だったようである。したがって捕獲もこの時期であった推定できる。注目されるのは夏季の魚体が約40cm~50cm強なのに対し冬期は1.5m~1.7mと3倍以上の大きなチョウザメがとれるとしている点である。おそらく夏季の個体は孵化後数年の川に滞留している個体と思われる。冬季の成魚が川のどこで捕獲されたのか記されていないが、季節的にみておそらく河口域での鮭網での捕獲と考えられる。

⑦「天塩アイヌの生活」更科源蔵（1956）

名寄町誌の「第三章天塩アイヌの生活」の中で更科はこの地域のチョウザメ漁について次のように記している。

「その漁獲法はさきにもものべたように小さいのは築にも入ったというが、多くはマレップで突くか流し鉤でもとつたという。この流し鉤は五六間もある長い竿の先に重りをつけた鉤で、これに引つかかると六、七尺もある鮫になると尋常ではあげることができない、うつかりしていると舟までひつくり返されるおそれがあるので鉤に綱をつけていて舟のつたまま鮫の疲れるまで舟をひかし、鮫が弱つたところへ更にマレップをうち込んで引上げるといったもので、なかなか大変であつた。」

年代は明記されていないが、明治期の漁の様子であろう。漁法は築、マレップ(マレック)、流し鉤の3つをあげている。

⑧『天塩紀行概略』横山荘三郎（1890）

前記⑦で更科源蔵は「天塩アイヌの生活」のなかで横山荘三郎『天塩紀行概略』を引用してい

る。

「土人「エクウシ」ナルモノ此辺ハ鮫オルトコロ
 (天塩河口ヨリ凡ソ四十里上え) ナリトテ例ノ
 「ツキ道具」ヲ以テ一心ニ水中ヲ伺ヒ居タリシカ
 ヤカテ得物ヲ認メシニヤ忽チ「マレツプ」ヲ投ケ
 付ケタリ狙ヒハ外ツレス得タリト桿ヲ引キ上ケン
 トセシニ魚ノ力ヤ強カリケン脆クモ桿ノ身を奪ヒ
 取ラレタリ アー口惜シヤトテ再ヒ他ノ「マレツ
 プ」ヲ取り出シ舟ノへ先ニ立チ上リツ、舟ヲ此処
 彼処ト片手ニ桿サシ廻ハシ再ヒ狙ヲ極メテ投ケツ
 ケタリ暫クシテ見ユルハ棒桿ノ先キ五六寸許リ水
 面ニ浮ヒ出テ或ハ浮ヒ流ニ逆ヒ或ハ流ニ従ヒ暫ノ
 間ハ浮キツ沈ミツ水面ニ飄ヒ其有様実ニ盛ニシテ
 不覚快ナリト拍手セリ 後チ棒ヲ引キ上ケ見レハ
 長サ五尺余ナル河鮫ニシテ最初受ケタル「モリ」
 ノ身ハ其儘肉中ニアリタリ実ニ彼レノ熟練ナルニ
 ハ感セリ」

この記録は明治22年(1889年)のことでマレツ
 クによるチョウザメ漁の様子がわかる。

⑨『増補改訂日本重要水産動物図 解説』大日本水
 産会(1897)

「(46)てふぎめ 鱒魚ノ字ヲ用ユ大サ五六尺ニ
 至ル海底ニ棲息シ六月ノ頃河川ニ浜リテ産卵ス北
 海道石狩川ヲ以テ主産ノ地ト為セドモ甚多カラズ
 其産卵ノ為メ河中ニ集マルヲ候ヒ之ヲ網獲ス」

この資料では「大きき五六尺、六月ごろ河川に
 廻り産卵、産卵のため河中に集まったところを網
 で捕獲」となっている。主産地は石狩川となっ
 ているが、個体数は非常に少ないこと、捕獲は産卵
 のため(淵)に集まったところを網で捕獲したこ
 とが記されている。

⑩「若林清作翁聞書」田中實(1980)

「来札のアイヌは日露戦争の後、樺太に引き揚げま
 した。
 その頃、灯台のあたりは遠藤漁場で役場の対岸は
 村山漁場でしたが、網によく蝶鮫が入りました。
 石狩川の河口一中村さんの漁番屋のあたりです。
 一に、ロシア人が来てムシロで小屋掛けをし、蝶

鮫を獲っていました。」

この話は明治24年(1891)石狩町生まれの若林
 清作氏から田中が聞き取りしたもので、石狩川河
 口の鮭網でチョウザメが捕獲されていたことが語
 られている。また捕獲法は不明ながらロシア人が
 チョウザメ漁をしていたことも語られており注目
 される。しかしロシア人がどのような経緯で漁の
 許可を得ていたかなど詳細は不明である。
 なお石狩河口での鮭網による混獲の例は榎本武揚
 の『シベリア日記』(諏訪部・中村編注2013)に
 も出てくる。それによると「わたしがかつて二五
 年前に石狩川を航行したときに川鮫が網にかかっ
 たということを知った」と書いていている。これ
 は若き日の榎本が嘉永7年(1854)堀織部正の随
 行として石狩に来た際の見聞を回想したものであ
 る。

⑪「開拓余録」志村幸治(1918)

士別町史(1951)開拓余録にこのような話が掲
 載されている。正確には捕獲法とという範疇から
 外れるが1間半(2.7m)の大チョウザメを猟師が
 鉄砲で撃ったという話である。

「話は当時山本という猟師が夜遅く山から降りてい
 つもの如く川添いに街(士別市街)へ出ようとし
 て川岸へ出るとその昏い水面の一坪程が、「ボー
 ツ」と鈍く光っていた。驚いた彼は早速肩の猟銃
 を降ろすとその鈍く光っている水面をねらって発
 砲した。暫くの間波だっていた川面が次第におさ
 まるとともに、いつかその不思議な光の物も消え
 てしまっていた。彼は恐怖を抑えて街へ帰りこの
 不思議な光る物について会う人ごとに語り、この
 珍しい話は暫くの間狭い街中の話題となった。し
 かしこの話も不可解なままに人々の口から忘れ去
 られていったが其の後名寄付近の漁網に長さ一間
 半程もある大魚が死んでそのまま、かかり大さわ
 ぎとなったが、これが後刻判明した「チョウザ
 メ」とゆうもので鉄砲で撃たれたものであること
 がわかり、この話は再び賑やかに人々の口の端に
 のぼっていた。光ったと思われたものは、そのサ
 メの背中に寄生した発光虫が光ったものとわかり
 不可解だった問題も一応ピリオドが打たれたわけ

である。」大正7年頃の話

この話はいわゆるホラ話として伝えられているようであるが、実はカナダのネイティブ（コースト・サリッシュ族）のチョウザメ漁の夜間漁の際2 m以上深い場所でもこの魚が燐光（phosphorescence）を発するため簡単に視認でき捕獲が容易だったということが書かれている（木村・木村，1987）。このような例から猟師に撃たれた土別のチョウザメも燐光を発していたのではないだろうか？

⑫昭和10年石狩川河口でのチョウザメ漁（田中 實，2001）

田中によると、昭和10年に北海道庁水産課から石狩町漁業組合に東京に送るためチョウザメ30匹捕獲の依頼があったといわれ、昭和10年7月8日の同組合日誌に「北海道庁水産課ニサメ（テウザメ）ヲ送ル」との記載がある。

これとの関係は不明だが同年8月3日付けで石狩町漁業組合長宛てに八幡町の藤井氏から「一金七円也 但し蝶鮫壱尾代金也」の請求書が出されている。

⑬「チョウザメ（天塩町引地啓儀談）」（朝日新聞社編，1967）

「大正年間から昭和の初めにかけては、天塩川と近海でずいぶんチョウザメがとれたものです。毎年4月から6月までのマス漁のシーズンには定置網に2、30匹かかった。ほかの漁夫の分も入れたら、ここらへんだけで一シーズン300匹ぐらいあがったでしょう。8月から11月のサケ定置網にもかかった。当時、天塩川ではサケを引網でとっていた。それにもチョウザメがはいっていた。最も大きいので記憶に残っているのは、7尺ほど（約2.3メートル）で、四人がかりでやっとかついだものだ。しかし、チョウザメはあばれない。まるで枯木のように静かだった。刺身や塩づけにして食べた。ほかのサメなんか問題にならないくらいおいしかった。ミリンぼしもこたえられなかった。黒っぽい卵も食べた。尾のほうからひっぱって取

出した長いスジは丈夫で炉の上のなべをつるすのに使ったりした。それが、昭和10年ごろからめっきり少なくなってしまった。」

この資料から読み取れるのは、天塩川河口及びその近海では、チョウザメの捕獲時期は4月～6月のマス漁の時期と8月～11月のサケ漁の2時期があったこと。捕獲は定置網や流し網によるものであるが、チョウザメを目的としたものでなく、厳密にはいえばマスあるいはサケ漁にともなう混獲だったことがわかる。中には2.3mを超えるもの見られ、これなどはダウリチョウザメだったのだろう。また1シーズンに300匹程度の漁獲があったと語られており、産卵や河口域に滞留していた個体が一網打尽にされていた様子がかがえる。

以上、明治から昭和10年代までの北海道におけるチョウザメの捕獲時期、捕獲法に関する資料を示したが、まとめると以下のようになる。

- ①捕獲時期は4月～6月あるいは8月～11月の2時期がみられる。
- ②捕獲法はテシ・ウライ、チセタ（網）、マレク（マレップ）、流し鈎、延縄、定置網などであった。
- ③捕獲場所は河川上流部（産卵場所付近）とチョウザメ遡上河川近くの海面及び河口である。
- ④天塩川河口付近のサケマス海面漁場では1シーズンに数百匹のチョウザメの混獲があった。

河村博（2003）によると「ミカドチョウザメは秋から冬に河口域に集まり、河口域で冬を過ごした後、翌春に川を上り産卵」するというから、捕獲時期の4月～6月はミカドチョウザメの産卵するため遡上した個体が捕獲され、また、8月～11月の漁では同じくミカドチョウザメの河口域付近の個体が捕獲されたものとみることができ。なおダウリアチョウザメの生態については良くわかっていないが、2mを超えるチョウザメの捕獲例や伝承からミカドと同様な生態と思われ、遡上時期なども同様と考えられる。

捕獲法では河川内では定置漁具のテシ・ウラ

イ、網、マレク（マレップ）などで捕獲された。これらはアイヌの伝統的漁具・漁法で近世に引き続き明治期にも彼らが用いて漁を行っていたことを示している。このほかに「イシカリアプ」（石橋，2015）など鉤類が使用されたと考えられる。また④の資料にある「チセタ」という網についてはアイヌの伝統漁具とみられるがどのようなものか不明である。

河口域や河口近くの海面での網漁の記録はサケマス等の定置網による混獲でチョウザメ専用の漁法ではない。また③の『北海道漁業志稿』にある配縄漁が専用の漁法であったかどうか調べる必要がある。さらに石狩川河口でのロシア人のチョウザメ漁はどのような手続きや権利関係で行われていたか不明であり、地域史漁業史の上でも興味深い問題が含まれており、この方面の調査も必要である。

引用文献

- 石橋孝夫，2015. 北海道チョウザメの博物誌1. いしかり砂丘の風資料館紀要，5：53-65.
- 松浦武四郎，1857. 天塩日誌全. 札幌市中央図書館デジタルライブラリー参照.
- 田所武編，1985. 鈴木銃太郎日記十勝開拓の先駆者とその人々. 柏季庵書房. 37, 144, 146.
- 小林正雄編，1961. 渡邊勝・カネ日記. 帯広市社会教育叢書No.7, 帯広市教育委員会. 35, 45.
- 北水協会，1935. 北海道漁業志稿. 北海道水産協会.
- 北海道毎日新聞社，1889. 石狩河鱒に関する問答. 第698号11月8日付記事.
- 志村幸治，1918. 開拓余録. 士別町史, 15-17. 士別町役場.
- 大瀧圭之介，1907. 北海道に普通に産するチョウザメ. 札幌博物学会会報1（7）：80-84.
- 大日本水産会編，1897. 訂正増補日本重要水産動物図解説. 高山社, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー.
- 興津寅亮，1894. 天塩川沿岸状況調査復命書（中）. 新しい道史第18巻第1号通巻76. 北海道.
- 木村英明・木村アヤ子，1987. 海と川のインディアン. 雄山閣.
- 河村博，2003. 北海道内在来種チョウザメの記録と研究紹介. 第1回在来種チョウザメの復活に関するシンポジウム報告書, 16-21.
- 榎本武揚著，諏訪部・中村編注，2013. 榎本武揚シベリア日記. 平凡社.
- 田中實，1980. 若林清作翁聞書. いしかり暦, 1：23-25.
- 田中實，2001. 石狩川の主チョウザメ. 石狩市郷土研究会2月例会発表資料.
- 北海道開拓使，1879. 伯林漁業博覧会解説書. 道立文書館蔵3682.
- アスターフィエフ，1976. ちょうざめ漁の穴場で 魚の王様上巻中田甫訳1983現代ロシアの文学2, 群像社.
- 朝日新聞社編，1967. チョウザメ. 北洋水族館. 朝日新聞社.
- 横山壮二郎，1890. 天塩紀行概略. 名寄町誌, 名寄町.
- 更科源蔵，1956. 第三章天塩アイヌの生活. 名寄町誌, 名寄町.
- 鈴木トミエ，2007. 新聞に見る石狩・厚田・浜益の歴史年表（明治21年～明治25年）第2号. 石狩市地方史研究会.